



TITLE:

G.ベイトソンとE.モランの<自己>概念をめぐる考察:自己教育を考えるためのノートとして(京都大学生涯教育学講座シニアキャンパス実施記念号)

AUTHOR(S):

安川, 由貴子

---

CITATION:

安川, 由貴子. G.ベイトソンとE.モランの<自己>概念をめぐる考察: 自己教育を考えるためのノートとして(京都大学生涯教育学講座シニアキャンパス実施記念号). 京都大学生涯教育学・図書館情報学研究 2005, 4: 161-176

ISSUE DATE:

2005-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/43862>

RIGHT:

## G. ベイトソンと E. モランの〈自己〉概念をめぐる考察

— 自己教育を考えるためのノートとして —

安 川 由貴子

Consideration on the Concept of “Self” by Gregory Bateson and Edgar Morin

— Note on self-education —

Yukiko YASUKAWA

### 1 はじめに

本稿では、グレゴリー・ベイトソンの〈自己〉概念と、エドガール・モランの〈自己〉概念を考察していくことを目的としている。

ベイトソンとモランはともに、サイバネティクスや情報理論、システム理論に影響を受けている点で、類似した部分が多く見られる。両者を取り上げる理由は、ともに、西欧近代科学を発展させてきたデカルト主義的な二元論・単純化のパラダイムに対して批判的であり、複雑性を包含したパラダイムの論理を探究したといえるからである。西欧近代的な認識には、部分と部分が複雑につながったネットワークを短く切断していく単純化思考の構造が組み込まれている。その結果、人間がモノ化して扱われることや、文化的土壌を考慮せずに西欧近代社会をモデルとした「開発」が開発途上国に対して行なわれることにもつながっていると言えるだろう。私たちもまた全体の大きなネットワークの中で依存しながら生きていることを忘れてしまいがちになっているのではないだろうか。近年、「サイエンス」「科学的」「客観的」といったような西欧近代科学を発展させ私たちの生活を支えてきたパラダイムに対する見直しが生じつつある。教育学においても近代学校教育のパラダイム転換をはじめとして、社会科学の基礎となってきた二元論的思考を乗り越えた論理が模索されているといえるだろう。

次に、なぜ〈自己〉を問題にするかということである。生涯学習において、自己教育は究極の形態として考えることができるのではないか。自己教育は、他者や先生から学ぶことを否定しない。私たちは他者や環境とともに在り、それらとの相互コミュニケーションの中で生きている。教師→生徒といったような固定的なヒエラルキーのある関係の中で捉えるのではなく、教える・伝える側にまわることもあれば、教えられる・学ぶ側にまわることもあるというダイナミズムの中で捉えていくことが必要である。ある時には自分の蓄積してきたものを他者に伝え、またある時には他者から学ぶ。学ぶ→教える（伝える）の関係を柔軟に自由に行き来することこそ、創造性のある自己教育につながるのではないだろうか。生涯学習というコンテクストで考える際にも、私たちは学習者である〈自己〉、自己教育のアクターである〈自己〉に

ついて考察する必要があると思われる。

そして、人間－自然、主体－客体、精神－身体など対立項として分離されていくことになった西欧近代的な認識を統一していこうとした、ベイトソンとモランの〈自己〉概念をみていくことを通じて、近代的なパラダイムに依るのとは別の〈自己〉概念が得られることを期待する。彼らの考える自己とは、環境や他者から切り離され、周囲から孤立した自己ではない。そもそも現実には私たちの精神と身体は分けられるものではない。複雑なコミュニケーションの世界で生きる私たちを、その複雑性の中で捉えていけるような〈自己〉を思考の前提に据える必要があるという考えのもと考察をすすめていきたい。このことによって、自己教育を考察していく上で大きな示唆が得られると考える。

## 2 G. ベイトソンの〈自己〉概念

### 2.1. G. ベイトソンによる西欧近代批判の一面

ベイトソンにとって、西欧近代科学が発展してきた背景にあるデカルト的二元論は乗り越えるべき対象であり、それが続く限りわれわれは破壊の方向に向かってしまうという危機意識をもっていた。なぜなら、それは近代科学を発展させた一方で、現実世界に広がる複雑な相互作用システムを、直線的（リニアル）な論理に単純化することになったからである。それによって、人間が精神をもった生身の人間であるということや、人々の文化的歴史的コンテキスト、人々が培ってきた太古の智慧や、「自然界との結びつきという本来の雄大な世界観<sup>1)</sup>」など、一見合理的に解決できないかのように思われる性質のものは、効率性が重視されるなかでは妨げにすぎず排除されていったといえる。また、ベイトソンは「目的というものに絡む、特定の、生にとって破壊的な、歪みの構造<sup>2)</sup>」に気づいていた。リニアルな思考では、「結果にプロセスを決定される目的論的誤謬<sup>3)</sup>」を産む可能性があるが、因と果のシステムが円環をなすときには、「一連のプロセスの最後に生じるパターンが、何らかの意味で、そのプロセスの通る経路の原因たりうる<sup>4)</sup>」。もちろん、人間は「目的」からは逃れられない生物であり、目的をもつことが悪いのではない。むしろ、目的自体が肥大化して一人歩きすることによって、手段を問わなくなる危険性を含んでいるということなのだろう。人間は精神をもっており、機械のように思う通りには動かないことは自明である。「人間はこれまで、たとえばキリスト教やテクノロジー信仰の中で『この世の楽園』の青写真を描き、手段を省みずにその実現を図るということを繰り返してきた。そしてそうした企ては、繰り返し悲劇のなかで挫折してきた<sup>5)</sup>」ように、その傾向は戦争や政治においては容易に想像できる。また、企業や学校などの私たちの日常生活においても、権力や財や地位を得るという目的が一人歩きしてしまうことがしばしば見られる。ベイトソンは、「現代の社会は、“自己”を最大限に増長しようとするものが満ちあふれている<sup>6)</sup>」と批判した。「自分の関心は自分であり、自分の会社であり、自分の種だという偏狭な認識論的前提に立つとき、システムを支えている、他のループはみな考慮の“外側”に切り落とされることになります。人間生活が生み出す副産物は、どこか“外”に捨てればよいとする心がそこから生まれ<sup>7)</sup>」、というように、〈自己〉に耽溺してしまうことに対する反省を促していると考えられる。「西欧の個を中心におく発想は、円環をなして進む出来事の回路をこわし

てしまう<sup>8)</sup>」ために、結果的には意識が自己の内部にばかり向いてしまい、他者や他のモノへの意識が薄れて、〈自己〉に収斂していつてしまうことになるのではないか。西欧近代的な個人主義の行きつく先であろうか。自己のまわりに広がるシステムをも一緒に含みこみながらの〈自己〉でなくてはならないのである。ベイトソンは、「人間のもつ特性のうちのあるものを最大化したり耽溺を助長しようとするような操作の危険を強調して止まなかった<sup>9)</sup>」。それゆえ、ベイトソンは、「西洋に特徴的な『自己』(セルフ)の観念を支える一群の諸前提<sup>10)</sup>」を問題にしたのである。

## 2.2. 〈自己〉の境界の移動

ベイトソンは、〈自己〉を円環的な自己修正システム (self-corrective system) として捉えている。身体と精神を二分化しないことと、フィードバックによる円環システムとして捉えるところに特徴がある。これは、個を括り取る境界に変化がもたらされることを意味する。この場合、個人の境界線を問うということはナンセンスだということになる。なぜなら、私たちが生きているコミュニケーションの世界では、皮膚を境とした身体的境界でもなく、一般に“自己”と呼びならわされているものとの境界とも異なり、精神プロセスを内包した一つのシステムとしての〈自己〉が動いていると考えることができるからである。

例えば、目の見えない人が杖を使って歩く場合、その人の“自己”とは、杖の柄と皮膚を境とした身体なのだろうか。実際のコミュニケーションの世界では、杖と身体が一体となって一つのシステムを作り、そのシステムがより大きなシステムのなかで境界を移動させているといえる。そのシステムとは私たち個人の身体をさすのではないし、そのシステムの中に“私”とか“自己”とかいう境界を明確に定めることは困難である。ピアノを弾いている場合も同様だろう。その人の〈自己〉とは、指と鍵盤で分けられた身体ではなく、鍵盤や弦をも自己システムの一部としながら、音楽を奏でているのである。鍵盤の一打一打は、前回奏でた音との関係によって制御されている。コミュニケーション論から見ると、「ピアノ (鍵盤—ダンパー—ハンマー—弦<sup>11)</sup>)—目—脳—筋—指—打—ピアノ」のシステム全体がフィードバック・ループをなし、最初の一打がもたらした「差異」の情報がその回路を循環し、次の一打に影響を与え自己修正しながら、全体として一つの音楽を奏でているプロセスとみることができる。正確には、「ピアノにある差異群」—「網膜に生じる差異群」—「脳内の差異群」—「筋内の差異群」—「指の動きの差異群」—「ピアノに生じる差異群」……という様に「差異」によってこのシステムを表記できる。鍵盤や弦は差異が変換しながら伝わっていく経路の一つにすぎず、この音を奏でる全体のシークウェンスは「差異」をもとに自己修正されていくプロセスであるといえる。ところが、通常は、この全体のシークウェンスを、「私がピアノを弾いた」という言い方をする。これは、「私」と「ピアノ」という二つの孤立した実体がまず存在し、両者の間に「エネルギー」が生じたという図式に従ったものである。ここで、「差異」は「エネルギー」とは相容れない概念であることを確認しておかなければならない。エネルギーは実体であるが、差異は関係に関する事柄であるから“そこ”には存在しない。存在しないこと (= 実体ではない差異) からエネルギーは生まれない。「反応を生じさせるエネルギーは、引き金となる出来

事が起こる前に、反応者の中に用意されている<sup>12)</sup>」のであり、差異が引き金となってエネルギーが引き出されるにすぎないのである。従って、物質の世界では、ガソリンが入っていないと車は動かし、お金を入れなければ自動販売機から飲み物は出てこないように、何もしないことすなわち「ゼロ（情報となる出来事の欠如）<sup>13)</sup>」は反応を引き起こさない。一方で、コミュニケーションの世界では、手紙をかかないこと、謝罪をしないこと、犬にえさをやらないこと、返事をしないこと、といったような「ゼロ」という差異もまた反応を引き起こし、状況次第で十分意味をもつことになる。このように、「差異」が回路内を次々と変換しながら伝わっていくプロセスが自己修正プロセスであり、精神プロセスであるといえる。「精神プロセスとは常にパーツ間の相互反応の連続と考える。精神現象を説明しようというのであれば、常に、複数の部分の組織のされ方、相互反応の仕方について語るのではなければならない<sup>14)</sup>」。石は“硬い”、“重い”などといったように、モノそれ自体が何らかの特性を“持っている”かのような表現をする際にも、実際には「どんな形容詞も、時間上で起こる最低二組の相互作用の結果に根ざしているのだということを頭に入れておくことが望ましい<sup>15)</sup>」。何かとの関係において、“硬い”のであり“重い”のである。“やさしい”人だ、“厳しい”人だなどといった人の性格についても同様である。「性格」というものは、その人個人が備えているのではなく、その人と他の何か（あるいは誰か）との間でおこる事象（関係のシークウェンス）の中で学習された〈自己〉の特性であるといえる<sup>16)</sup>。従って、「あるひとの本質を知ろうとして、関係の外側に引き出して見ても、なにもつかみ取ることはできない。ひとを『個』として知ろうとするのは、端的に誤り<sup>17)</sup>」だということになる。「関係とは常に、二重記述の産物である<sup>18)</sup>」。はじめに関係があるのである。「差異」に目を向けるということは、各部分の相互作用、関係性、コンテクストでつながる円環システムを壊さないということをも意味する。そして、このようなプロセス全体を見据えていくことが肝心なのである。ベイトソンは、「“自己”という独立した行為者があって、それが独立した“対象”に、独立した“目的”を持った行為をなすのだ」と考えることに對して批判的であったのである。

次に、コミュニケーションの世界には論理階型が存在していることを理解しておく必要がある。例えば、二人の子どもがちゃんばらごっこをしながら遊んでいる場合、それは「二人の間で交わされる個々の行為やシグナルが、けんかの中で交わされるものに似て非なる相互作用を行っていた」と記述できる。「これは遊びだ」つまり「今やっているこれらの行為（おもちゃの刀剣での打ち合い）は、それが表す行為（打ち合い）を表わすところのもの（本当のけんかとしての打ち合い）を表わしはしない」というメッセージが交換され互いに識別できていたために、両者の間で「遊び」が成立したのだといえる<sup>19)</sup>。このメッセージの交換が両者の間でうまくいかなかった場合、一瞬のうちに「けんか」に転ずる可能性を秘めている。このことは、コミュニケーションには論理階型（logical type）が存在することを意味している。相手をたたくという行為そのものが示すメッセージと、その行為が表すところのものは表さないつまり「これは遊びだ」という抽象レベルにあるメタ・メッセージがあり、これらは別々の論理階型に当てはめることができる。ここでもまた、子どもひとりひとりを独立した別個の人間であるという見方をやめて、〈子どもA－子どもB〉をひとつのシステムとしてみていく必要がある。

遊びや会話において、相手とのコミュニケーション・システムの中で“自己”の境界を区切ることはできない。「異種間のコミュニケーションは、いかなる場合も、自分の側で作りあげるコンテキストを互いに修正し合っていく、学習のコンテキストの中にある。言い換えれば、個々の信号の解釈においてメタメッセージの誤解や混乱があっても、さらに一般抽象的なレベルで、相互理解が成り立ちうるのである<sup>20)</sup>」。

ベイトソンが精神と呼ぶシステムは、自己修正的であることから、ランダム性を含んでいるともいえる。そして選択の能力を備えているといえる。ベイトソンは、ゲームを例に挙げて、「ゲームがなされることとゲームが創られること、これは同一の現象である。実際ゲームをする身になってみれば、その行為の連続の中に何かしら筋書きにない、独創的な部分がなくなってしまうたら、もはやゲームとしての意味がないということがわかるはずだ。次はこうしてこうなると最後までわかってしまえば、それはもうゲームではない。儀式である。<sup>21)</sup>」と言っている。このような試行錯誤と呼ばれるストカスティックなプロセスを通じて、新しいものを生み出す可能性を残しているのである。「学習」という現象もまたこのような基準を満たす精神プロセスの中で起こるといえる。学習もまた、すべてプログラム通りに進むものではなく何かが起こる可能性が含まれているからこそ創造性の発揮につながる。ランダム性に目を向けてそのランダム性を楽しむということは、結果よりもプロセスに価値を見出していくことにもなるだろう。

以上のようなことは、わたしたちの思考の分析単位に変化をもたらすことを意味している。つまり、コミュニケーション的行為を考えると、私たちの思考の中心を個人の内におくのではなく、対象との関係の中に移動させていくことを意味している。〈自己〉というのは、単独で孤立したものではなく、環境や他者やモノを含んだ全体を一つの自己修正システムである。そして、さまざまな関係の中でダイナミックな動きをもちながらその都度〈自己〉が更新・創造されていくシステムであるといえる。

### 3 E. モランの〈自己〉概念

#### 3.1. E. モランによる単純化思考に対する批判の一面

次に、モランの考える〈自己〉の概念について見ていくことにするが、彼は依存か自立かというような二項対立的に考える方法をとらない点でとても興味深い。モランは、生きた個体を考えるには依存－自立といった対立する用語を連結するような理論を示すことが必要であると考えていた。西洋を支配することになった主体－客体の分離、精神と物質の分離、人間と自然の対置に対して、複雑性の原理から出発してそれら分離されていたものを結合していくことを目指していた。われわれ生きた個体が複雑性の中で生きているにも関わらず、近代化によって進められてきた単純化思考は「現実を複雑ではない断片に裁断し、そして、この断片を孤立させ<sup>22)</sup>」てしまう。そして、矛盾を排除し、曖昧さや多義性も考慮にいれないために、われわれは物質的な個体に還元されてしまうことになる。したがって、還元論的な単純化のパラダイム<sup>23)</sup>では切り落とされてきた複雑性を、むしろ逆に理論によって明るみにだされるべきであるとモランは考えていた。そして、複雑性を含むことのできる別の論理によって「主体」概念を

定義しようとしたのである<sup>24)</sup>。「科学によって拒否されてきた主体の概念<sup>25)</sup>」や「主体の排除を命ずる西洋科学のパラダイム<sup>26)</sup>」といったモランの表現に見られるように、「主体」概念が形而上学や人間主義的な概念としてしか扱われてこなかったことの反省を促し、生きた個体の定義に「主体」が必要不可欠なことを示すことによって、「主体」概念の脱形而上学化あるいは自然化を試みたといえる。

モランは、西洋近代科学が支配してきた分離・孤立のパラダイムを超えていくためには、「開放」の概念を取り入れる必要があると考えた。開放の概念とは、「もろもろの存在の理解を可能にする原理の内に、恒常的なものと変化するもの、動くものととどまるもの、自立と依存を結合する必要性を導入する。そしてとくに、古典的なもろもろの本体が、対立・分離・排除で定義されていたのに反して、開放は実存しつつあるものの同一律の真只中に、排除されてきた第三項を導入する。周囲がそれだ。生態学的関係の原理は、その原理から他者性と周囲とを取り除くことによって、自己充足のなかでもろもろの対象を孤立させてきた、閉じた同一性〔アイデンティティー〕の概念を決定的に開く<sup>27)</sup>」というようなことを意味する。「一個の生物の独立は、周囲への依存を必要としている<sup>28)</sup>」のである。モランは、「生物の膜や国境をも含めて、およそ境界なるものは、障壁であると同時にコミュニケーション・交流の場である。それは分離と結合、切離と接合の場だ。それは、押し返すと同時に通過させるフィルターだ。それは浸透圧による流れを成立させるものであり、同質化を妨げるものである<sup>29)</sup>」と考える。境界において、開放と封鎖が相互依存的に生じているのである。そして、周囲は、ともに存在しているだけではなく、ともに組織するものである。例えば、渦を考えた場合、橋のまわりで渦を組織するのは何なのだろうか。「流れ・橋・渦巻過程は、自分自身に対して施錠しながら渦と化するような生成性をともに生産し、ともに組織するものである<sup>30)</sup>」。すなわち周囲というのは、何かとの相互作用を通して組織していくものである。従って、周囲との関係は依存的でありながら、不断に生成過程を組織していく。また、開放は、周囲への働きかけを促進したフィードバックを及ぼす。こうして、生物は周囲を改造しながら、自己を生産していくのである。自己とは決して不動のものではなく、常に活気づいている。自己には、時間の概念も介入しなければならない。自己とは空間に描かれるシステムではなく時間のダイナミズムにおいて、常に再生成しているからである。「〈自己〉の発想は主要なものだ。それは開放システムのオリジナルで基本的な封鎖をなす。それは機械存在（人工のものでない）の自立性の核になる発想だ<sup>31)</sup>」とモランはいう。そして、「自己（auto）」という接頭辞の意味をつかむことができないかぎり、「生物の組織の作り出す自立性は、幻影のように空虚のなかをただようか、他律的規定によって解消させられてしまうかのどちらかであろう<sup>32)</sup>」とモランはいう。そこで、まずこの接頭辞である自己を名辞「自己（autos）」に変えることによって自己の意味を呼びさましていくことになる<sup>33)</sup>。

### 3.2. <sup>オート</sup>自己＝（遺伝＝表現＝）組織のもつ二つの相対的自立性

まず、個体の問題を自己の回帰する「自己＝（遺伝＝表現＝）生態組織<sup>アウトス</sup>」のなかに位置づけなければならない。生きた組織は、基本的に自己＝（遺伝＝表現＝）生態組織であるというこ

とを意味している。これは、遺伝素を単に表現素<sup>34)</sup>から切り離すこともできないし生態から切り離すこともできないことと、回帰的組織であるということを示す。遺伝素と表現素は、相互作用・相互依存の関係のみならず、回帰する組織のダイナミックな総体においても不可分の関係にある<sup>35)</sup>。両者は、自己組織的回帰のなかで、共同組織者として機能しているのである。



この関係においては各項が他項の再生成に参加している。また、遺伝素と表現素が、生態とも切り離せない理由は、「表現型は現象存在における遺伝子型の表現であるばかりではない。それは環境による束縛と刺激の特徴を含んでいる<sup>37)</sup>」からである。「この相互依存が全体の自立を形づくり、そのことを通じて双方の自立をも形づくっている<sup>38)</sup>」。また、遺伝素と表現素の統一性・相補性を認識するだけでなく、潜在的または顕在的敵対を含んでいることも理解しなければならない。つまり、「遺伝素の閉鎖性と表現素の開放性との対立<sup>39)</sup>」である。これは、「生きた組織の必然的に開放され・封鎖された性格を産み出す<sup>40)</sup>」ことになる。遺伝素は遺伝的同一性への再封鎖をもたらし、表現素は環境への開放をもたらす。このことは、「自己が、開かれていると同時に閉じられており、不変的であり、かつ可変的であり、二つの時間観念の結合・分離を通じて一時的なものと長期的なものとを結びつけると同時に切り離している<sup>41)</sup>」ことの原因になっているといえる。

モランによると、自己は、このような絶対<sup>アウトス</sup>に不可分である二つの意味を同時にもっており、以下のような二つのレベルで自立性を示しているという。

自己 (autos)	
同じもの (idem) ……直接的意味	自分自身 (ipse) ……再帰的意味
同一のもの (idem) ……種を定義する オート 自己再生産 ……再生産の次元 種 遺伝にかかわる (再生産・再生成) 再生産にあてられ、「愛他主義」 生成レベル	同一性 (idem) ……個体を定義する オート 自己組織 ……個別存在の次元 個体 現象型〔表現型〕にかかわる (計算し、行動する一個の存在としての個別的実存) 個体の自立にあてられ、「利己主義」 現象レベル

(本文<sup>42)</sup>をもとに筆者追加作成)

自己は基本的に二つのレベルで自立性を備えている。ひとつは、生成レベル (種属と遺伝に関係したレベル) 一個体を産出し・再産出する超個体的過程のレベルであり、もうひとつは



現象レベル—環境のなかで存在しているコトイマの個別実存のレベルである<sup>43)</sup>。この二つのレベルの自立性は相互に規定・結合しながら、切り離しがたいものである。有機体だけでなく、細胞の段階においてもそうである。それと同時に、この自立性は二重の依存を必要としている。つまり、われわれは遺伝＝依存性と生態＝依存性を基礎として成立している。そして、「たえず個別存在の依存を保ちながら、個別存在の自立性の生産と発展を養うということになる<sup>44)</sup>」。生きた個体は、常にパラドックスを含みながら成立するのである。「もしも個体に概念の視点を合わせるなら、種は抽象にすぎなくなる」ように、種と個体は、相対的に対立しながら依存しているというように、パラドックスを含んだ関係にある。

そして、自己が回帰的組織であるという理解は全体を通じて非常に需要である。回帰的組織とは、「みずからの（再）組織と実在に必要な要素と結果を生産するような組織のことである。それはこのこと自体から自己組織的組織である。生きた組織は回帰する機械組織である<sup>45)</sup>」ことを意味する。自己とは、たえず自分で自分を組織する組織、つまり自己組織なのである。自己は、「静的不変性に支えられた自己同一性ではなく、別々の似かよった二つの項目間の同一性でもなく、一個のバックルの統一性である。このバックルは、たえず自分自身に帰りながら、同じものを同様に生産し再生産する。自己は渦巻状バックルの仲間である<sup>46)</sup>」。このように、生きた個体である自己は、「自己＝（遺伝＝表現）生態＝再組織の産物であると同時に生産者<sup>47)</sup>」であり、たえず再—生成しているのである。

以上のように、生きた個体である自己は、回帰的組織の中で、同じもの（idem）と自分自身（ipse）という二重の意味をもっており、遺伝と生態に全面的に依存しながら相対的に自立しているといえるのである。

### 3.3. 自己参照性と自己中心主義

自己組織すなわち自己＝（遺伝＝表現＝）組織が前提とし内包する特徴として、「自己への参照性」と「自己中心主義」をモランは挙げている。〈自己〉とは再帰代名詞であり、自分自身やそれ自身のことをさす言葉である。この二つの性質もまた、互いに切り離せないものであり、「利己主義的」性格をもっているといえる。

自己への参照性とは次のことを意味している。「個体＝主体が計算と決定を行なうとき、たんに『客観的』データすなわち有機体的機械の内部的・外部的データを参照するばかりでなく、まさに参照の中心として自分自身をも参照するということである<sup>48)</sup>」。すなわち、それは、「自己指示または自己情報に戻りながら、自分自身との関係を確立するという特質である<sup>49)</sup>」。自己参照性の観念は、閉じた観念ではなく、基本的要求として外部参照性（すなわち生態参照性）を必要とする。「自己参照性とは必然的に自己＝外部参照性<sup>50)</sup>」なのである。

自己中心主義とは、私たちが自分のために計算する存在であることは避けられないということの意味している。人工機械とは異なり、自分の・自分による・自分のための計算をしている、つまり自己＝中心の計算をしているのである。「自分自身の生存を確保するためには、食料を摂取しなければならないという不断の必要性、自分自身の生存を防御しなければならないという不断の必要性から、必ず生命存在はエゴ（＝自己＝）中心的行為者になってしまう<sup>51)</sup>」。全

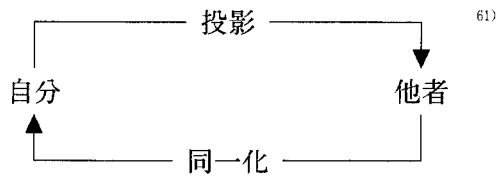
体としてこの行為者の活動は、自分のための自分の活動になっている。動物界の発展はエゴ＝自己＝中心主義の驚くほどゆたかな発展を構成してきた。「利己主義的」性格が避けられないという意味は、一つには自分自身の生存確保のための食料摂取や生存の防御という不断の必要性から、生命存在は必ずエゴ（＝自己＝）中心的行為者になってしまうということである。「実際、エゴ＝自己＝中心的計算は、たえず〈自分〉と〈非自分〉との差別を確立し、自分や自分の欲求や利害や目的に応じて〈自分〉と〈非自分〉を扱う<sup>52)</sup>」。「〈自分〉と〈非自分〉との区別をしながら〈自分〉を確立していくのである。「能動的な自己確立は、あらゆる生命存在の特質<sup>53)</sup>」である。

ここで「計算する」という語が意味する内容について触れておかなければならない。モランは、計算<sup>コンピュテーション</sup>という用語を単純な勘定の意には矮小化していない。むしろ、原語「計算すること com-puter」であり、《puter》の意味に「検討する、評価する、値ぶみする、想定するなど」、 「com」の意味に「とともに、一緒に、切り離されているものを結びつけたり対照したりすること、結びつけられているものを切り離したり分離したりすることなど」を想定している<sup>54)</sup>。「存在物＝主体のあらゆる計算は、計算・認識行為であると同時に、真・偽、有益・有害・善・悪……などの基準に照らして価値を分配していく行為である<sup>55)</sup>」。これらの、自己への参照、自己中心主義という性質もまたすべてバックル概念（回帰的組織）の中で捉えられている。

ここでは、自己組織のもつ「利己主義的」な性格をみてきたが、エゴイズムと愛他主義とは絶対的に切り離したり対立させたりすることはできない。人間は、他者のために尽くしたり犠牲になったりすることもまた真である。「個体＝主体は、エゴイズムの極であるが、同時に愛他主義の極でもある。というのは、個体＝主体は遺伝・組織論・社会学にかかわる共同体のためにみずからの存在を犠牲にすることができるからである。しかしこの愛他主義は服従から切り離すことはできない<sup>56)</sup>」。自己は常にこの二重性の中で生きているのである。

### 3.4. 「他者構造」の包含——相互コミュニケーションに向けて——

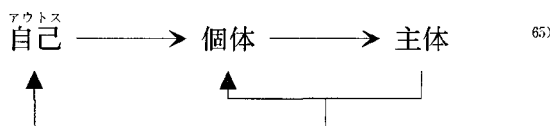
しかしながら、上のような性質のみでは自己を理解するのには不十分である。自己組織は、コミュニケーションにかかわる概念でもあるからである。「個体概念は、自己充足的であるわけにはいかない<sup>57)</sup>」のである。「すべての個体＝主体はコミュニケーションの産出者・受信者であり、個体（細胞または多細胞）のあいだのあらゆる提携は、同類のあいだでの相互コミュニケーションを含んでいる<sup>58)</sup>」。「したがって、同類は共通のアイデンティティーに基礎を置きつつコミュニケーションを行なうのであり、彼らのコミュニケーションの記号や合図は情報を運ぶだけでなく、同一性の確認をも運ぶのである<sup>59)</sup>」。「各自が他のもののうちに、異なった個体＝主体——別ノ自分——と同時に自分に似通った主体——モウヒトツノ自分——を認める<sup>60)</sup>」。つまり同類間の相互コミュニケーションにおいて、他者をモウヒトツノ自分・別の自分として投影し、主観的に自己と他者とを同一化することができる。



また、「少なくとも高等動物にあっては、いかなる主体も、現実存在するモウヒトツノ自分・別の自分や同類や両親とのコミュニケーションまたは一体化なしには完成されえない。そして、個別的同一性は、自分のうちに集中的・持続的に両親や子供や友だちなどを含むことによって、自分を養い豊かにしてゆく。われわれ人間にあっては、アイデンティティーは、もっと強い意味で一者であるが、同時にそれは、だんだんと複数存在になっていく<sup>62)</sup>」。「個体＝主体は、外界・別の自分とコミュニケーションを行なうための必然的な開放のなかで、唯我独尊をまねがれる<sup>63)</sup>」ように、他者性を含んでいるのである。このように、相互コミュニケーションにおいては、自己から自分自身へと回帰してくる自己組織の回路の中に、潜在的に「他者構造」を包含している。つまり、自己組織は、自己と自分自身との自己コミュニケーションだけでなく、他者とコミュニケーションを持つ可能性を開いているのである。そして同時にまた、「あらゆる自立は、なんらかの意味で孤独<sup>64)</sup>」であり、それゆえに外的世界や他者とのコミュニケーションを必要としているのである。

### 3.5. 自己・個体・主体の三位一体概念装置

ここでは、自己・個体・主体の関係において、自己と<sup>アウトス</sup>個体＝主体は絶対に切り離せないものであることを理解することが重要である。

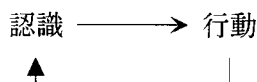


まず、主体の概念は基本的に生物学的なものであり、「生きた個体に特有な、自己＝（遺伝＝表現＝）組織に緊密に結びつけられた存在性質または存在形態<sup>66)</sup>」である。そして、主体の概念は複合的であるため、いかなる用語を使ってもそれだけを取り出して還元することはできない。「この複雑性のパラダイムは、古典的な単純化パラダイムと対立している。古典的パラダイムは、必ず位階秩序化（主人になる項目と従者になる諸項目のあいだで）や物象化（主人の項目が実質的実体となる）や分離や還元を引き起こす。自己のパラダイムは、還元も位階秩序も分離も実体化も引き起こさない。さらに、それは全体主義化しない。個体と主体の項目は、自己に吸収されることはない<sup>67)</sup>」。そして、主体の概念は、自己や個体から遠くはなれた王国からやってくるのではなく、生命そのものから誕生するのであり、生きた個体とともにあるものなのである。したがって、主体概念は生きた<sup>アウトス</sup>個体の定義に必要不可欠なものである。更に、「個体＝主体の概念は、自己の<sup>アウトス</sup>産物であると同時に生産者でもある<sup>68)</sup>」。このように、自己は、

多次元的で回帰的な概念としてとして形成されなければならない。

### 3.6. プログラムと戦略

モランは、認識と行動に関わって、「認識と行動を規定するのは、同じ神経＝脳髄装置であるので、認識と行動の発展は相互依存の関係にある<sup>69)</sup>」と述べる。



動物にとって外界の認識の必要性は、不確実な僥倖に満ちた環境の中で生死に関わるために強いといえることから、「認識の問題は不確実性の問題である<sup>70)</sup>」といえる。そして不確実性・僥倖性・危険性に含まれた環境の中で認識し行動していくためには、どうしても戦略が必要である。そこでモランは、「プログラムと戦略」について述べている。このことは、生きた個体のもつ自立性を考える上でも非常に重要であると考ええる。

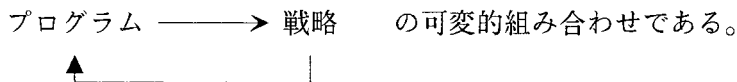
以下は、プログラムと戦略の相違を表にまとめたものである。

プログラム（「あらかじめ、記入されるもの」の意）	戦 略
内容に変化なし （別のプログラムまたはひとつの戦略によって停止させられたり、とってかわられたりするだけである）	可変性
あらかじめ定められた行動の組織化	助けを見出し迂回路を見つける（反転と迂回）
同一に事柄のなかで同一の事柄を繰り返す	開かれ、変化している
実行のための安定した条件を必要とする	予期せざる事柄・新しい事柄に立ち向かう
即興のものでも刷新的なものでもない	即興の思いつきで斬新である
その展開過程で、形だけの微小な僥倖と障害しか受け入れることができない	目的に到達するために、僥倖や障害や逆境を利用する
運用過程では、形だけの微小な誤りしか許しえない	その誤りを（自己改善のために）利用し、対抗者の誤りを（対抗者を正しい道から踏み外させるために）利用する。
制御と計算上の監視を怠るわけにはいかない	制御と監視をもちろん必要とするが、そのほかに、いかなる時にも、権能・イニシアチヴ・決定を必要としている

（本文<sup>71)</sup>をもとに筆者作成）

上述のように互いに相違がありながらも、プログラムと戦略は、敵対的であると同時に相補

的でもある。「生きたすべての過程は、事実上、戦略とプログラムの混合比が変化することから成立する<sup>72)</sup>」。平常はプログラムを実行しているが、予期しないことが起きた場合にはプログラムから戦略へと移ることが多い。一般に、「戦略からプログラムへ移る方が、プログラムから戦略へ移ることよりも容易である<sup>73)</sup>」ということができる。個体発生の遺伝「プログラム」や動物の行動についても同様のことがいえる。



また、プログラムの複雑化は戦略の排除を意味するのではなくむしろ戦略的イニシアチヴによってプログラムを中断する可能性を増やすし、戦略の発展も今度はプログラム系列を利用して効率化を図りながら、決定的な地点と瞬間において戦略的機能を十分に発揮することを可能にする<sup>74)</sup>。「しかし、戦略の概念は、依然としてプログラムの概念よりもゆたかで幅広く基本的なものである。プログラムは戦略から生まれるのであって、その逆ではない<sup>75)</sup>」。また、規定化され変化がなくなってきた戦略は、戦略であることをやめてプログラムとなる。「戦略的英知は、プログラムのうちでもっとも確実なものをどの時期にも捨て去ろうとする傾向を持っている<sup>76)</sup>」。戦略について語る場合は、ゲームについても語らざるを得ないが、ゲームは規則に従いながらも、常にゲームの不確実性・偶然性をもっている。「戦略は行動における自立性の最高段階であるばかりではない。それはまた、行動の形における発案能力でもある<sup>77)</sup>」。プログラムに抑圧されず、戦略が十分に力を発揮できることが望ましいのである。

#### 4 G. ベイトソンとE.モランの〈自己〉概念の比較検討

以上のようなベイトソンとモランの〈自己〉概念をここで簡単ではあるが比較してみたい。ベイトソンもモランも、生きた個体を問題にしている。ベイトソンは、為政者が社会を操作するときの道具が、「ハンマーでもドライバーでもなく生身の人間だ<sup>78)</sup>」ということを忘れていたのだという表現をしている。モランは、「生きた個体」という表現を頻繁に使用している。なぜ、このように「生きている」という意の形容詞をわざわざつけているのか。物質的なモノではなく、生きているものを対象にしているということと、社会においてこの意味が軽視されていることを強調したかったからであろう。生きた個体も持っているシステムの複雑性のなかで語られるようにしなければならないのである。複雑性の中で語っていくとはどういうことかは更に検討していかなければならないが、両者ともに〈自己〉を円環システムとして捉え、常に再一生成していく過程であると捉えている点で共通していたと言える。

ベイトソンは、このような過程を「精神プロセス」と呼んだ。二つのものの「差異」が反応を引き起こす引き金となる。反応を引き起こす原因をそのものの内部にもとめるのではなく、二者もしくはそれ以上のものとの関係の中にもとめていくのである。このことは文脈や環境の中に対象をおいて理解していくことをも意味することになる。自己は、そのプロセスを通じて常に自己修正していくことによって自己変容しているのである。また、相互コミュニケーション

ンにおいて、常にメッセージが「二重性」を帯びていることを意識していくことも重要である。コミュニケーションにおいて交換されているものは、一つのメッセージではなく、言葉や仕草や雰囲気や状況など複数のレベルのメッセージがあり、そのような抽象レベルにあるメッセージを私たちは巧妙に処理しているのである。一つのレベルのメッセージには還元できない。

一方、モランは、「開放と封鎖」を同時に行なっているのが自己であり、何かとの相互作用を通して組織していく「周囲」を通して自己を再生産していくのだと説明する。そして、生きている個体のもつ複雑性を、「同じもの (idem)」という種の存続にも関わる遺伝素的側面と、「自分自身 (ipse)」でありその個別存在の意味に関わる表現素的側面の両方から捉えていく必要があるとする。そして、遺伝素の中にも表現素の中にもそれぞれに依存性と自立性が相互に働きあっている。自己は、遺伝や生態に依存しながらもその人自分自身という個別性を自ら発揮していく自立性を備えているのである。それが、主体であると言い換えることもできる。主体とは、生きた個人にもともと備わっている性質として考えることができるのである。

このように、自己を「修正していく」と表現するベイトソン、「組織していく」という表現するモラン、両者ともに、自己というものを、スタティックなプロセスではなく自らのもつ自立性によって変容していくダイナミックなプロセスとして捉えていることが分かる。自己とは、空間に描かれる一種類のイメージではなく、時間のダイナミズムの中で再一生成されていくものとして捉えていく必要がある。

一方で、両者とも同様に回帰的な再一生成モデルとして自己を捉えているにも関わらず、モランの方がより、自己がもつ自立性を捉えていこうとしていると思われる。自己が自ら働きかけていく、自ら運動していく、といったような内部からの動的プロセスが表現されているといえる。主体を、生きた個体がもともと備えている概念として説明しようとしたことからそれを読み取ることができる。最初は存在していなかった主体が次第に形成されていくということとは意味が異なるのである。そしてまた、生きた個人は、他者や環境に構造的に包含されているし、むしろ他者や環境がなくては生きていけないものであるが、いかにしても利己主義的な性質を完全に排除することはできないのだという現実に向かい合っている点もモランの特徴と言えるだろう。このとき、自己がもつ利己主義的な性質は、エゴイズムの極と愛他主義の極とが対立していることを意味するのではなく、常にこの両方が存在しているという「二重性」の中で行動している。また、「プログラムと戦略」のもつ性格の違いを論じている点も自立性を考える上では有効であると考えられる。生きた個体はプログラムと戦略をつねに使い分けながら生きているが、戦略の要素が強い方がより変化を恐れずあるいは変化を好み、クリエイティブな過程を進んでいくプロセスであるということが出来るだろう。

## 5 おわりに

以上のように、西欧近代的な認識に対して批判的でありそれとは別の認識を探究したベイトソンとモランが試みたことは、リニアルな思考から円環的な思考への移行であるといえる。それは、細かく切断された思考を再度つないでいく作業であると言えるだろう。つまり、単線的でプログラムされた目的一手段のみを重視する作業から、ランダム性を含んで常に再生成され

ていくプロセスへと価値を移動していく作業であるはずである。そうして生まれる結果は、確実性は減少するが逆に創造性は高まることが期待される。自立か依存か、能動的か他動的かといった二項対立的に考える認識をやめようとする、ナンセンスだと感じる、それが第一歩であるだろう。なぜならそれは、まさに敵対的でありながらも相補的な関係にあるからである。

そして、ベイトソンとモランが考えた〈自己〉概念は、「生きている」個体として考えるために、複雑性を含みこんで捉えていくことを目指している。〈自己〉とは孤立した実体ではなく、周囲と相互に依存した関係にあり、自己修正しながら生成を繰り返している回帰的なプロセスにあるということである。〈自己〉は他者や環境に依存しながら同時に自立性をもっている存在である。そして、このプロセスは、他者や環境に対して開かれているのである。他者性を包含しているし必要としているのである。自己とは、時間のダイナミズムの中で捉えていく必要のある、再生成のダイナミックなプロセスである。

このような〈自己〉の概念の中で、モランが自己のもつ自立性という点に特に着目して詳細に研究した点はベイトソンとは異なる特徴といえるだろう。自己は、同じもの (idem) という再生産の次元と自分自身 (ipse) という個別存在の次元を二重にあわせもっており、この二つのレベルで自立性を備えているのだという。これまで述べてきたように、この二つの次元は切り離せないものである。また、自分の・自分による・自分のための計算をしているという自己中心主義という性質をもっていることは避けられない。そしてモランがいうように、内容に変化がなく実行のために安定した条件を必要とする「プログラム」と、可変的であり即興性があり予期せざる事柄に立ち向かうような「戦略」もまた、敵対的であると同時に相補的であるプロセスを私たちは生きている。私たちは、プログラムの要素の中で生きていることが殆どであるが、自己教育を考えていくとき、戦略的要素に着目していくことはとても意味があるのではないだろうか。創造性がより発揮されると考えるからである。今回は触れられなかったが、ベイトソンは自己の自立性よりもむしろ、自己の質の変容に関心を向けていた点からモランとの違いをみることができると考えている。

ベイトソンとモランの〈自己〉概念は、それぞれに共通点をもちながらも相違点も当然ある。しかしながら、還元論的ではない自己概念を探究する試みとしては多くの示唆を得られたと考えている。今後は以上でみてきたようなコミュニケーション的な〈自己〉概念をもとにしながら自己教育について考察していきたい。

1) Bateson, G., *Mind and Nature: A Necessary Unity*, New Jersey, 1979, 佐野良明訳『精神と自然——生きた世界の認識論 (改訂版)』、新思泉社、2001年、p. 192. (以下、『精神と自然』と略す。)

2) Mary Catherine Bateson, *With a daughter's eye: a memoir of Margaret Mead and Gregory Bateson*, New York, 1984, 佐藤良明・保坂嘉恵美 訳『娘の眼から——マーガレット・ミードとグレゴリー・ベイトソンの私的メモワール』国土社、1993年、p. 319. (以下、『娘の眼から』と略す。)

3) G. ベイトソン、『精神と自然』p. 79.

4) *ibid.*, p. 78.

5) Bateson, G., *Steps to an Ecology of Mind*, Chicago and London, 1972, 佐藤良明訳『精神の生態学』

- (改訂第2版)』、新思泉社、2000年、p. 243.
- 6) *ibid.*, p. 593.
- 7) *ibid.*, p. 640.
- 8) メアリー・キャサリン・ベイトソン、『娘の眼から』p. 325.
- 9) *ibid.*, p. 331.
- 10) G. ベイトソン『精神の生態学』p. 428.
- 11) ピアノは、鍵盤を押さえることによって、弦の振動を止めているダンパーが上がり、それと同時に鍵盤を押した勢いでハンマーが弦をたたくことによって音になる。ハンマーは弦を叩いた後すぐに弦から離れるが、ダンパーは鍵盤を離した時に同時に下がり、弦の振動が止められて、音の響きが止まる。(ピアノの構造)  
(<http://okumedia.cc.osaka-kyoiku.ac.jp/~masako/exp/kichu/urawaza/kouzou.html>)
- 12) G. ベイトソン『精神と自然』p. 138.
- 13) *ibid.*, p. 60.
- 14) *ibid.*, p. 127.
- 15) *ibid.*, p. 80.
- 16) G. ベイトソン『精神の生態学』p. 405.
- 17) メアリー・キャサリン・ベイトソン『娘の眼から』p. 210.
- 18) *ibid.*, p. 181.
- 19) *ibid.*, p. 262.
- 20) G. ベイトソン『精神と自然』p. 160.
- 21) *ibid.*, p. 187.
- 22) Morin, E., *La Méthod 2: La vie de la vie*, Paris, 1980, 大津真作訳『方法2 生命の生命』法政大学出版局、1991年、p. 638。(以下、『方法2』と略す。)
- 23) 「単純化のパラダイムは、通俗的な副＝言説の方面で原子化を引き起こし(生命存在の組織論的根拠を基礎単位すなわち分子・情報・遺伝子のなかに置くことによって)、機械論に傾いた(生きた組織の論理を人工機械の論理に還元することによって)、物象化をもたらす(情報・プログラムの実体化によって)性格を重くのしかからせている。」(エドガール・モラン『方法2』p. 200.)
- 24) 「主体の定義にあたって、ヒューマニズムのやり方(そこでは主体の概念が自己意識というすぐれた人間的な性質を前提としている)も、形而上学のやり方(主体を超越的概念に仕立てあげる)も、反形而上学のやり方(主体を非実在性に捧げる)もとらない。」(エドガール・モラン『方法2』p. 254.)
- 25) *ibid.*, p. 253.
- 26) *ibid.*, p. 242.
- 27) Morin, E., *La Méthod 1: La nature de la nature*, Paris, 1977, 大津真作訳『方法1 自然の自然』法政大学出版局、1984年、p. 322。(以下、『方法1』と略す。)
- 28) *ibid.*, p. 314.
- 29) *ibid.*, p. 313.
- 30) *ibid.*, p. 314.
- 31) *ibid.*, p. 328.
- 32) E. モラン『方法2』p. 158.
- 33) *ibid.*, pp. 158-159.
- 34) モランは、遺伝素 *genos* を種属 *generique*、生成 *generateur*、遺伝 *genetique* に関係した用語として、表現素 *phenon* をひとつの環境の中でココトイマの現象的実存に関係した用語(ひとつの環境の内部にココトイマの形で存在する単数的個性を現す用語)として使用している。そして、これらの二つの要素は、相対的に対立しながらもどちらも依存しあっており不可欠であることから、そのパラドックスを含んだ性質を「単一双性」と表記している。(ibid., p. 166)
- 35) *ibid.*, p. 182.



- 36) *ibid.*, p. 183.
- 37) *ibid.*, p. 177.
- 38) *ibid.*, p. 184.
- 39) *ibid.*, p. 190.
- 40) *ibid.*, p. 190.
- 41) *ibid.*, p. 188.
- 42) *ibid.*, p. 156, p. 159, p. 189.
- 43) *ibid.*, p. 153.
- 44) *ibid.*, p. 212.
- 45) *ibid.*, p. 182.
- 46) *ibid.*, p. 416.
- 47) *ibid.*, p. 447.
- 48) *ibid.*, p. 258.
- 49) *ibid.*, p. 258.
- 50) *ibid.*, p. 446.
- 51) *ibid.*, p. 251.
- 52) *ibid.*, p. 258.
- 53) *ibid.*, p. 246.
- 54) *ibid.*, p. 248.
- 55) *ibid.*, pp. 259-260.
- 56) *ibid.*, p. 333.
- 57) *ibid.*, p. 216.
- 58) *ibid.*, p. 326.
- 59) *ibid.*, p. 326.
- 60) *ibid.*, p. 327.
- 61) 図は、*ibid.*, p. 327.
- 62) *ibid.*, pp. 437-438.
- 63) *ibid.*, p. 447.
- 64) *ibid.*, p. 308.
- 65) 図は、*ibid.*, p. 411.
- 66) *ibid.*, p. 227.
- 67) *ibid.*, p. 423.
- 68) *ibid.*, p. 416.
- 69) *ibid.*, p. 358.
- 70) *ibid.*, p. 359.
- 71) *ibid.*, pp. 360-362.
- 72) *ibid.*, p. 362.
- 73) *ibid.*, p. 362.
- 74) *ibid.*, p. 363.
- 75) *ibid.*, p. 363.
- 76) *ibid.*, p. 364.
- 77) *ibid.*, p. 370.
- 78) グレゴリー・ベイトソン『精神の生態学』p. 243.